

Sanshirō Chapter 12 (Natsume Sōseki)

えんげいかい ひかくてきさむ とき ひら とし はようやく お つ 詰まってくる。ひと はつ か た ら ず の 目
演芸会は比較的寒い時に開かれた。年はようやく押し詰まってくる。人は二十日足らずの目
のさきに はる ひか いち い いそが しからんとしている。おつねん はかりごと ひんじゃ
頭こうべに落ちた。演芸会はこのあいだにあって、すべてののどかなるものと、余裕よゆうあるものと、春
と暮くれの差別さべつを知らぬものしを迎えた。

それが、いくらでもいる。たいていは若い男女わか なんによである。一日目いちじつめに与次郎よじろうが、三四郎さんしろうに向かって
大成功だいせいこうと叫んだ。三四郎ふつかめは二日目の切符きつぷを持っていた。与次郎ひろたせんせいが広田先生きさそを誘いって行けとい
う。切符ちがが違ちがうだろうと聞けば、むろん違ちがうと言う。しかし一人ひとりでほうっておくと、けっして
行くき気づかいがないから、君きみが寄よって引ひ張ばり出だすのだと理由わけを説明せつめいして聞かせた。三四郎しょうちは
承知しょうちした。

ゆうこく い 夕刻ゆうこくに行ってみると、先生あかは明るいランプの下したに大きな本おおほんを広げていた。

「おいでになりませんか」と聞くと、先生すこは少し笑わらいながら、無言むごんのまま首くびを横よこに振ふった。
子供こどものような所作しよさをする。しかし三四郎がくしゃには、それが学者おもらしく思おもわれた。口くちをきかないとこ
ろがゆかしく思おもわれたのだろう。三四郎ちゅうごしは中腰ちゅうごしになって、ぼんやりしていた。先生ことは断ことわつ
たのが気きの毒どくになった。

「君行きくなら、いっしょに出でよう。ぼくも散歩さんぽながら、そこまで行くから」

先生くろは黒い回套まわしを着きて出でた。懐手ふところらしいがわからない。空そらが低ひくくたれている。星ほしの見えない
寒さである。

あめ 「雨あめになるかもしれない」

ふ こま 「降ふると困こまるでしょう」

ではい にほん しばいごや げそく てんき とき へん な 不便ふべんだ。それ
で小屋こやの中なかは、空気くうきが通かよわなくて、煙草タバコが煙けむって、頭痛ずつうがして、——よく、みんな、あれ
で我慢がまんができるものだ」

「ですけれども、まさか戸外でやるわけにもいかないからでしょう」

「お神楽はいつでも外でやっている。寒い時でも外でやる」

三四郎は、こりや議論にならないと思って、答を見合わせてしまった。

「ぼくは戸外がいい。暑くも寒くもない、きれいな空の下で、美しい空気を呼吸して、美しい芝居が見たい。透明な空気のような、純粋で簡単な芝居ができそうなものだ」

「先生の御覧になった夢でも、芝居にしたらそんなものができるでしょう」

「君ギリシアの芝居を知っているか」

「よく知りません。たしか戸外でやったんですね」

「戸外。まっ昼間。さぞいい心持ちだったろうと思う。席は天然の石だ。堂々としている。与次郎のようなものは、そういう所へ連れて行って、少し見せてやるといい」

また与次郎の悪口が出た。その与次郎は今ごろ窮屈な会場のなかで、一生懸命に、奔走しかつ斡旋して大得意なのだからおもしろい。もし先生を連れて行かなかろうものなら、先生はたして来ない。たまにはこういう所へ来て見るのが、先生のためにはどのくらいいいかわからないのなのに、いくらぼくが言っても聞かない。困ったものだなあ。と嘆息するにきまっているからなおもしろい。

先生はそれからギリシアの劇場の構造を詳しく話してくれた。三四郎はこの時先生から、[Theatron, Orchestra, Skênê, Proskênion]の講釈を聞いた。なんかいうドイツ人の説によるとアテンの劇場は一万七千人をいれる席があったということも聞いた。それは小さいほうである。もっとも大きいのは、五万人をいれたということも聞いた。入場券は象牙と鉛と二通りあって、いずれも賞牌みたような恰好で、表に模様が打ち出してあったり、彫刻が施してあるということも聞いた。先生はその入場券の価まで知っていた。一日だけの小芝居は十二銭で、三日続きの大芝居は三十五銭だと言った。三四郎がへえ、へえと感心しているうちに、演芸会場の前へ出た。

さかんに電燈がついている。入場者は続々寄って来る。与次郎の言ったよりも以上の景気である。

「どうです、せっかくだからおはいりになりませんか」

「いやはいらない」

先生はまた暗い方へ向いて行った。

三四郎は、しばらく先生の後影を見送っていたが、あとから、車で乗りつける人が、下足札を受け取る手間も惜しそうに、急いではいつて行くのを見て、自分も足早に入場した。前へ押されたと同じことである。

入口に四、五人用のない人が立っている。そのうちの袴を着けた男が入場券を受け取った。その男の肩の上から場内をのぞいて見ると、中は急に広くなっている。かつはなはだ明るい。三四郎は眉に手を加えないばかりにして、導かれた席に着いた。狭い所に割り込みながら、四方を見回すと、人間の持つて来た色で目がちらちらする。自分の目を動かすからばかりではない。無数の人間に付着した色が、広い空間で、たえずめいめいに、かつかつてに、動くからである。

舞台ではもう始まっている。出てくる人物が、みんな冠をかむって、沓をはいていた。そこへ長い輿をかついで来た。それを舞台のまん中でとめた者がある。輿をおろすと、中からまた一人あらわれた。その男が刀を抜いて、輿を突き返したのと斬り合いを始めた。――三四郎にはなんのこともかまるでわからない。もっとも与次郎から梗概を聞いたことはある。けれどもいいかげんに聞いていた。見ればわかるだろうと考えて、うんなるほどと言っていた。ところが見れば毫もその意を得ない。三四郎の記憶にはただ入鹿の大臣という名前が残っている。三四郎はどれが入鹿だろうかと考えた。それはどうてい見込みがつかない。そこで舞台全体を入鹿のつもりでながめていた。すると冠でも、沓でも、筒袖の衣服でも、使う言葉でも、なんとなく入鹿臭くなってきた。実をいうと三四郎には確然たる入鹿の観念がない。日本歴史を習ったのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿の事もつい忘れてしまった。推古天皇の時のようでもある。欽明天皇の御代でもさしつかえない気がする。応神天皇や聖武天皇ではけっしてないと思う。三四郎はただ入鹿じみた心持ちを持っているだけ

である。芝居を見るにはそれでたくさんだと考えて、唐めいた装束や背景をながめていた。しかし筋はちっともわからなかった。そのうち幕になった。

幕になる少しまえに、隣の男が、そのまた隣の男に、登場人物の声が、六畳敷で、親子差向かいの談話のようだ。まるで訓練がないと非難していた。そっちの男は登場人物の腰が据わらない。ことごとくひよろひよろしていると訴えていた。二人は登場人物の本名をみんな暗んじている。三四郎は耳を傾けて二人の談話を聞いていた。二人ともりっぱな服装をしている。おおかた有名な人だろうと思った。けれどももし与次郎にこの談話を聞かせたらさだめし反対するだろうと思った。その時うしろの方でうまいうまいなかなかうまいと大きな声を出した者がある。隣の男は二人ともうしろを振り返った。それぎり話をやめてしまった。そこで幕がおりた。

あすこ、ここに席を立つ者がある。花道から出口へかけて、人の影がすこぶる忙しい。三四郎は中腰になって、四方をぐるりと見回した。来ているはずの人はどこにも見えない。本当をいうと演芸中にもできるだけは気をつけていた。それで知れないから、幕になったらばと内々心あてにしていたのである。三四郎は少し失望した。やむをえず目を正面に帰した。

隣の連中はよほど世間が広い男たちとみえて、左右を顧みて、あすこにはだれがいる。ここにはだれがいるとしきりに知名の人の名を口にする。なかには離れながら、互いに挨拶をしたのも、一、二人ある。三四郎はおかげでこれら知名な人の細君を少し覚えた。そのなかには新婚したばかりの者もあった。これは隣の一人にも珍しかったとみえて、その男はわざわざ眼鏡をふき直して、なるほどなるほどと言って見ている。

すると、幕のおりた舞台の前を、向こうの端からこっちへ向けて、小走りに与次郎がかけて来た。三分の二ほどの所で留まった。少し及び腰になって、土間の中をのぞき込みながら、何か話している。三四郎はそれを見当にねらいをつけた。——舞台の端に立った与次郎から一直線に、二、三間隔てて美禰子の横顔が見えた。

そのそばにいる男は背中を三四郎に向けている。三四郎は心のうちに、この男が何かの拍子に、どうかしてこっちを向いてくれればいいと念じていた。うまいぐあいにその男は立った。すわりくたびれたとみえて、柙の仕切りに腰をかけて、場内を見回しはじめた。その時三四

郎は明らかに野々宮さんの広い額と大きな目を認めることができた。野々宮さんが立つとともに、美禰子のうしろにいたよし子の姿も見えた。三四郎はこの三人のほかに、まだ連がいるかいないかを確かめようとした。けれども遠くから見ると、ただ人がぎっしり詰まっているだけで、連といえば土間全体が連とみえるまでだからしかたがない。美禰子と与次郎のあいだには、時々談話が交換されつつあるらしい。野々宮さんもおりおり口を出すと思われる。

すると突然原口さんが幕の間から出て来た。与次郎と並んでしきりに土間の中をのぞきこむ。口はむろん動かしているのだろう。野々宮さんは合い図のような首を縦に振った。その時原口さんはうしろから、平手で、与次郎の背中をたたいた。与次郎はくると引っ繰り返って、幕の裾をもぐってどこかへ消えうせた。原口さんは、舞台を降りて、人と人との間を伝わって、野々宮さんのそばまで来た。野々宮さんは、腰を立てて原口さんを通した。原口さんはばかりと人の中へ飛び込んだ。美禰子とよし子のいるあたりで見えなくなった。

この連中の一挙一動を演芸以上の興味をもって注意していた三四郎は、この時急に原口流の所作がうらやましくなった。ああいう便利な方法で人のそばへ寄ることができようとは毫も思いつかなかった。自分もひとつまねてみようかしらと思った。しかしまねるという自覚が、すでに実行の勇気をくじいたうえに、もうはいる席は、いくら詰めても、むずかしからうという遠慮が手伝って、三四郎の尻は依然として、もとの席を去りえなかった。

そのうち幕があいて、ハムレットが始まった。三四郎は広田先生のうちで西洋のなんとかいう名優のふんしたハムレットの写真を見たことがある。今三四郎の目の前にあらわれたハムレットは、これとほぼ同様の服装をしている。服装ばかりではない。顔まで似ている。両方とも八の字を寄せている。

このハムレットは動作がまったく軽快で、心持ちがいい。舞台の上を大いに動いて、また大いに動かせる。能掛りの入鹿とはたいへん趣を異にしている。ことに、ある時、ある場合に、舞台のまん中に立って、手を広げてみたり、空をにらんでみたりするときは、観客の眼中にほかのものはいっさい入り込む余地のないくらい強烈な刺激を与える。

その代り台詞は日本語である。西洋語を日本語に訳した日本語である。口調には抑揚がある。節奏もある。あるところは能弁すぎると思われるくらい流暢に出る。文章もりつぱ

である。それでいて、気が乗らない。三四郎はハムレットがもう少し日本人じみたことを言うてくれば良いと思った。おっかさん、それじゃおとっさんにすまないじゃありませんかと言いいそうなところで、急きゆうにアポロなどを引合ひきあいに出だして、のん気にやってしまう。それでいて顔かおつきは親子とも泣おやこきだしそうである。しかし三四郎はこの矛盾むじゆんをただ臆おぼろげ氣かんに感じたのみである。けっしてつまらないと思おもいきるほどの勇ゆう氣きは出でなかつた。

したがって、ハムレットに飽あきた時は、美禰みね子この方ほうを見ていた。美禰みね子こが人の影かげに隠かくれて見えなくなる時は、ハムレットを見ていた。

ハムレットがオフェリヤに向むかって、尼寺あまでらへ行ゆけ尼寺あまでらへ行ゆけと言うところへきた時、三四郎はふと広田先生ひろたせんせいのことを考かんがえ出だした。広田先生は言いった。——ハムレットのようなものけっこんに結け婚こんができるか。——なるほど本ほんで読よむとそうらしい。けれども、芝居しばいでは結け婚こんしてもよさそうである。よく思案しあんしてみると、尼寺あまでらへ行ゆけとの言いい方かたが悪わるいのだろう。その証しょうこ拠こには尼寺あまでらへ行ゆけと言いわれたオフェリヤがちきっとも氣どくの毒どくにならない。

幕まくがまたおおりた。美禰みね子ことよし子こが席せきを立たった。三四郎もつづいて立たった。廊下ろうかまで来きてみると、二人ふたりは廊下なかの中なかほどで、男おとこと話はなしをしていいる。男おとこは廊下なかから出ではいりりのできる左ひだり側がわの席せきの戸口とぐちに半はん分ぶんから出だした。男おとこの横よこ顔がをみた時とき、三四郎はああとへ引ひき返かえした。席せきへ返かえらずに下足げそくを取とって表おもてへ出でた。

本来ほんらいは暗くらい夜よである。人ひとの力ちからで明あかくした所ところを通とおり越こすと、雨あめが落おちていいるようおもに思おもう。風かぜが枝えだを鳴ならす。三四郎は急いそいで下宿げしゆくに帰かえった。

夜半よなかから降ふりだした。三四郎は床とこの中なかで、雨おとの音きを聞ききながら、尼寺あまでらへ行ゆけといいう一い句くを柱はしらにして、その周まわり圍わりにぐるぐる低てい徊かいした。広田先生ひろたせんせいも起おききているかもしれれない。先生せんせいはどどんな柱はしらを抱いだいていいるだろう。与次郎よじろうは偉い大だいなる暗くら闇やみの中なかに正しょう体たいなく埋うままっているに違ちがいない。……

あくる日は少ひし熱すこがする。頭あたまが重おもいから寝ねていた。昼飯ひるめしは床うの上えに起おき直なおって食くった。また一ひと寝ね入いりすると今こん度どは汗あせが出でた。氣きがううとくくなる。そこへ威い勢せいよく与次郎よじろうがははいいって来きた。ゆうべも見みえず、けこさうも講こう義ぎに出いないようだからどうしたかと思たずって尋たずねたといいう。三四郎は礼れいを述のべた。

「なに、ゆうべは行ったんだ。行ったんだ。君が舞台の上に出てきて、美禰子さんと、遠くで話をしていたのも、ちゃんと知っている」

三四郎は少し酔ったような心持ちである。口をききだすと、つるつると出る。与次郎は手を出して、三四郎の額をおさえた。

「だいぶ熱がある。薬を飲まなくっちゃいけない。風邪を引いたんだ」

「演芸場があまり暑すぎて、明るすぎて、そうして外へ出ると、急に寒すぎて、暗すぎるからだ。あれはよくない」

「いけないたって、しかたがないじゃないか」

「しかたがないたって、いけない」

三四郎の言葉はだんだん短くなる、与次郎がいいかげんにあしらっているうちに、すうすう寝てしまった。一時間ほどしてまた目をあけた。与次郎を見て、

「君、そこにいるのか」と言う。今度は平生の三四郎のようである。気分はどうかと聞くと、頭が重いと答えただけである。

「風邪だろう」

「風邪だろう」

両方で同じ事を言った。しばらくしてから、三四郎が与次郎に聞いた。

「君、このあいだ美禰子さんの事を知ってるかとぼくに尋ねたね」

「美禰子さんの事を？ どこで？」

「学校で」

「学校で？ いつ」

与次郎はまだ思い出せない様子である。三四郎はやむをえずその前後の当時を詳しく説明した。与次郎は、

「なるほどそんな事があったかもしれない」と言っている。三四郎はずいぶん無責任だと思っ
た。与次郎も少し気の毒になって、考え出そうとした。やがてこう言った。

「じゃ、なんじゃないか。美禰子さんが嫁に行くという話じゃないか」

「きまったのか」

「きまったように聞いたが、よくわからない」

「野々宮さんの所か」

「いや、野々宮さんじゃない」

「じゃ……」と言いかけてやめた。

「君、知ってるのか」

「知らない」と言い切った。すると与次郎が少し前へ乗り出してきた。

「どうもよくわからない。不思議な事があるのだが。もう少したたないと、どうなるんだか
見当がつかない」

三四郎は、その不思議な事を、すぐ話せばいいと思うのに、与次郎は平気なもので、一人での
みこんで、一人で不思議がっている。三四郎はしばらく我慢していたが、とうとう焦れたく
なって、与次郎に、美禰子に関するすべての事実を隠さずに話してくれと請求した。与次郎
は笑いだした。そうして慰謝のためかなんだか、とんだところへ話頭を持って行ってしまっ
た。

「ばかだなあ、あんな女を思って。思ったってしかたがないよ。第一、君と同年ぐらいじ
ゃないか。同年ぐらいの男にほれるのは昔の事だ。八百屋お七時代の恋だ」

三四郎は黙っていた。けれども与次郎の意味はよくわからなかった。

「なぜというに。二十前後の同じ年の男女を二人並べてみる。女のほうが万事上手だあね。
男は馬鹿にされるばかりだ。女だって、自分の軽蔑する男の所へ嫁へ行く気は出ないやね。
もっとも自分が世界でいちばん偉いと思ってる女は例外だ。軽蔑する所へ行かなければ独身

で暮らすよりほかに方法はないんだから。よく金持ちの娘や何かになんかそんなものがあるじゃないか、望んで嫁に来ておきながら、亭主を軽蔑しているのが。美禰子さんはそれよりずっと偉い。その代り、夫として尊敬のできない人の所へははじめから行く気はないんだから、相手になるものはその気でいなくっちゃいけない。そういう点で君だのぼくだのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はとうとう与次郎といっしょにされてしまった。しかし依然として黙っていた。

「そりゃ君だって、ぼくだって、あの女よりはるかに偉いさ。お互いにこれでも、なあ。けれども、もう五、六年たたくなくっちゃ、その偉さ加減がかの女の目に映ってこない。しかし、かの女は五、六年じっとしている気づかいはない。したがって、君があんな女と結婚する事は風馬牛だ」

与次郎は風馬牛という熟字を妙なところへ使った。そうして一人で笑っている。

「なに、もう五、六年もすると、あれより、ずっと上等なのが、あらわれて来るよ。日本じゃ今女のほうが余っているんだから。風邪なんか引いて熱を出したってはいじまらない。——なに世の中は広いから、心配するがものはない。じつはぼくにもいろいろあるんだが、ぼくのほうであんまりうるさいから、御用で長崎へ出張すると言ってね」

「なんだ、それは」

「なんだって、ぼくの関係した女さ」

三四郎は驚いた。

「なに、女だって、君なんぞのかつて近寄ったことのない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌の試験に出張するから当分だめだって断わっちゃまった。ところがその女が林檎を持ってステーションまで送りに行くと言いだしたんで、ぼくは弱ったね」

三四郎はますます驚いた。驚きながら聞いた。

「それで、どうした」

「どうしたか知らない。林檎を持って、停車場に待っていたんだろう」

「ひどい男だ。よく、そんな悪い事ができるね」

「悪い事で、かあいそうな事だとは知ってるけれども、しかたがない。はじめから次第次第に、そこまで運命に持っていかれるんだから。じつはとうのさきからぼくが医科の学生になっていたんだからなあ」

「なんで、そんなよけいな嘘をつくんだ」

「そりゃ、またそれぞれの事情のあることなのさ。それで、女が病気の時に、診断を頼まれて困ったこともある」

三四郎はおかしくなった。

「その時は舌を見て、胸をたたいて、いいかげんにごまかしたが、その次に病院へ行って、見てもらいたい方がいいかと聞かれたには閉口した」

三四郎はとうとう笑いだした。与次郎は、

「そういうこともたくさんあるから、まあ安心するがよかろう」と言った。なんの事だかわからない。しかし愉快になった。

与次郎はその時はじめて、美禰子に関する不思議を説明した。与次郎の言うところによると、よし子にも結婚の話がある。それから美禰子にもある。それだけならばいいが、よし子の行く所と、美禰子の行く所が、同じ人らしい。だから不思議なのだそうだ。

三四郎も少しばかにされたような気がした。しかしよし子の結婚だけはたしかである。現に自分がその話をそばで聞いていた。ことによるとその話を美禰子のと取り違えたのかもしれない。けれども美禰子の結婚も、まったく嘘ではないらしい。三四郎ははっきりしたところが知りたくなった。ついでだから、与次郎に教えてくれと頼んだ。与次郎はわけなく承知した。よし子を見舞いに来るようにしてやるから、じかに聞いてみろという。うまい事を考えた。

「だから、薬を飲んで、待っていないくってはいけない」

「病気が直^{なお}っても、寝^ねて待っている」

ふたりは笑^わって別^{わか}れた。帰^{かえ}りがけに与次郎が、近^{きんじよ}所の医^い者^{しゃ}に來^ててらう手続^{てつづ}きをした。

晩^{ばん}になつて、医^い者^{しゃ}が來^きた。三^{さん}四^し郎^{ろう}は自^じ分^{ぶん}で医^い者^{しゃ}を迎^{むか}えた覺^{おぼ}えがな^いんだから、はじ^{すこ}めは少^{すこ}し狼^{ろう}狽^{ばい}した。そのう^ち脈^{みやく}を取^とられたのでや^{やく}く氣^きが^ついた。年^{とし}の若^{わか}い丁^{てい}寧^{ねい}な男^{おとこ}である。三^{さん}四^し郎^{ろう}は代^{だい}診^{しん}と鑑^{かん}定^{てい}した。五^ご分^{ぶん}ののち病^{びよう}症^{しやう}はインフルエンザと^きま^つつた。今^{こん}夜^や頓^{とん}服^{ぶく}を飲^のんで、な^るべ^く風^{かぜ}にあ^たら^ないよ^うにしろと^いう注^{ちゆう}意^いである。

翌^{よく}日^{じつ}目^めがさ^めると、頭^{あたま}がだ^いぶ軽^かくな^つてい^る。寝^ねてい^れば、ほ^とん^ど常^{じやう}体^{たい}に近^{ちか}い。た^だ枕^{まくら}を離^{はな}れると、ふ^らふ^らする。下^げ女^{じよ}が來^きて、だ^いぶ部^へ屋^やの中^{なか}が熱^ね臭^{つく}いと^いつた。三^{さん}四^し郎^{ろう}は飯^{めし}も食^くわ^ずに、仰^あおむ^むに天^{てん}井^{じやう}をな^がめ^てい^た。時^{とき}々^{とき}う^とうと眠^{ねむ}く^なる。明^あら^かに熱^あと疲^ねれ^とと^つら^われた^あり^さま^であ^る。三^{さん}四^し郎^{ろう}は、と^らわ^{れた}ま^ま、逆^{さか}ら^わず^に、寝^ねた^りさ^めた^りす^るあ^いだ^に、自^し然^{ぜん}に^した^が従^いう^い種^{しゆ}の快^{かい}感^{かん}を^え得^えた。病^び症^{しやう}が^か軽^かい^から^だと^いつた。

よ^よじ^じかん^{かん}、五^ご時^じ間^{かん}と^たつ^うち^に、そ^ろそ^ろ退^{たい}屈^{くつ}を^かん^じだ^{した}。し^きり^に寝^ねが^え返^うり^を打^うつ。外^{そと}は^いい^い天^{てん}氣^きで^ある。障^{しょう}子^じにあ^たる^日が、次^じ第^{だい}に影^{かげ}を^{うつ}移^{うつ}して^ゆく。雀^{すずめ}が^な鳴^なく。三^{さん}四^し郎^{ろう}は^きよ^うも^も与^よ次^じ郎^{ろう}が^あそ^びに^き來^きて^くれ^ばい^いと^いつた。

と^ころへ下^{おんな}女^なが障^{しょう}子^じをあ^きあ^けて、女^{おんな}のお客^{きやく}様^{さま}だ^とい^う。よ^よし^し子^こが、そ^う早^{はや}く^き來^きよ^うと^は待^{まち}ち^ま設^{もう}け^なか^つた。与^よ次^じ郎^{ろう}だ^けに敏^{びん}捷^{しやう}な^{はたら}働^{はたら}き^をし^た。寝^ねた^まま、あ^け放^{はな}し^の入^い口^{ぐち}に^めを^つけ^てい^ると、や^がて^た高^{たか}い^{すが}姿^しが^し敷^う居^えの^あ上^うへ^あら^ら現^{むら}わ^さけ^た。き^よう^は紫^{むら}の^さ袴^{はか}を^はい^てい^る。足^{あし}は^りよ^うほう^ろう^かに^ある。ち^よつ^とは^いる^のを^ちう^ちよ^{よう}す^みを^み躡^あつ^たり^した^よう^すみ^が見^みえ^る。三^{さん}四^し郎^{ろう}は^かた^とこ^あを^あげ^て、「い^らっ^しや^い」と^いつた。

よ^よし^し子^こは障^{しょう}子^じを^たて^て、枕^{まくら}元^{もと}へ^すわ^つた。六^{ろく}畳^{じやう}の座^ざ敷^{しき}が、取^とり^み乱^だして^ある^うえ^に、け^さは^そう^じ掃^せ除^まを^しな^いか^ら、な^お狭^{せま}苦^{くる}しい。女^{おんな}は、三^{さん}四^し郎^{ろう}に、

「寝^ねて^いら^っし^やい」と^いつた。三^{さん}四^し郎^{ろう}は^あた^まま^くら^を枕^{まくら}へ^つけ^た。自^じ分^{ぶん}だ^けは^おだ^やか^であ^る。

「臭^くく^はな^いで^すか」と^き聞^きいた。

「ええ、^{すこ}少し」と言ったが、べつだん臭い顔も^{かお}しなかった。「^{ねつ}熱がおありなの。なんなんでしょう、^{ごびょうき}御病気は。^{いしゃ}お医者はいらして」

「^き医者はゆうべ来ました。インフルエンザだそうです」

「^{はや}けさ早く^{ささき}佐々木さんがおいでになって、^{おがわ}小川が病気だから^{みま}見舞いに行^いってやってください。^{なんびょう}何病だかわからないが、^{かる}なんでも軽くはないようだっておっしゃるものだから、^{わたくし}私も^{みねこ}美禰子さんもびっくりしたの」

^{よじろう}与次郎がまた少しほらを^ふ吹いた。^{わる}悪く言^いえば、^つよし子を^だ釣り出したようなものである。三四郎は^{ひと}人がいいから、^き気の^{どく}毒でならない。「^{どうも}どうもありがとう」と言^いって寝^いている。よし子は^{ふろしきづつ}風呂敷包^{なか}みの中^{みかん}から、^{かご}蜜柑^だの籠を出した。

「^{ごちゅうい}美禰子さんの御注意があ^かったから買^かってき^{しょうじき}ました」と正^{こと}直^{みやげ}な事^{こと}を言^いう。ど^{みやげ}ち^{こと}ち^{こと}のお見舞^{みやげ}だ^{こと}かわ^{こと}ら^{こと}ない。三四郎はよし子^{たい}に^{れい}対^のして^の礼^のを^の述^のべて^のお^のいた。

「^{いそが}美禰子さんもあがるはずですが、このごろ少し忙^{いそが}しいもの^{いそが}ですから——どうぞよろしくって……」

「^{なに}何か^{とくべつ}特別^{いそが}に忙^{いそが}しい^{いそが}こと^{いそが}が^{いそが}でき^{いそが}た^{いそが}の^{いそが}です^{いそが}か」

「ええ。できたの」と言^いった。^{おお}大きな^{くろ}黒^めい目^めが、^{うえ}枕^おにつ^おいた^お三四郎^おの顔^おの上^おに^お落^おち^おて^おい^おる。三^お四^お郎^おは^お下^おから、^{あお}よし子の^{あお}青^{あお}白^{あお}い^{あお}額^{あお}を^{あお}見^{あお}上^{あお}げ^{あお}た。は^{あお}じ^{あお}めて^{あお}こ^{あお}の^{あお}女^{あお}に^{あお}病^{あお}院^{あお}で^{あお}会^{あお}った^{あお}昔^{あお}を^{あお}思^{あお}い^{あお}だ^{あお}した。今^{あお}でも^{あお}もの^{あお}う^{あお}げ^{あお}に^{あお}見^{あお}え^{あお}る。同^{あお}時^{あお}に^{あお}快^{あお}活^{あお}で^{あお}あ^{あお}る。頼^{あお}り^{あお}に^{あお}な^{あお}る^{あお}べ^{あお}き^{あお}す^{あお}べ^{あお}て^{あお}の^{あお}慰^{あお}謝^{あお}を^{あお}三^{あお}四^{あお}郎^{あお}の^{あお}枕^{あお}の^{あお}上^{あお}に^{あお}も^{あお}た^{あお}ら^{あお}し^{あお}て^{あお}き^{あお}た。

「^{みかん}蜜柑^{みかん}を^{みかん}む^{みかん}い^{みかん}て^{みかん}あ^{みかん}げ^{みかん}ま^{みかん}し^{みかん}ょう^{みかん}か」

^{おんな}女^{あお}は^{あお}青^{あお}い^{あお}葉^{あお}の^{あお}間^{あお}から、^{くだもの}果^{くだもの}物^{くだもの}を^{くだもの}取^{くだもの}り^{くだもの}出^{くだもの}した。渴^{かわ}いた^{かわ}人^{かわ}は、^か香^かに^かほ^かと^かぼ^かし^かる^か甘^{あま}い^{あま}露^{あま}を、^{つゆ}した^{つゆ}た^{つゆ}か^{つゆ}に^{つゆ}飲^{つゆ}んだ。

「^{おいしい}おいしい^{みねこ}で^{みねこ}し^{みねこ}ょう。美^{みねこ}禰^{みねこ}子^{みねこ}さん^{みねこ}の^{みねこ}お^{みねこ}見^{みねこ}舞^{みねこ}よ」

「^{もう}もう^{もう}た^{もう}く^{もう}さん」

女は袂たもとから白しろいハンケチを出して手てをふいた。

「野々宮ののみやさん、あなたの御縁談ごえんだんはどうになりました」

「あれぎりです」

「美禰子くちさんにも縁談の口があるそうじゃありませんか」

「ええ、もうまとまりました」

「だれですか、さきは」

「私わたしをもらおうと言ったかたなの。ほほほおかしいでしょう。美禰子あにさんのお兄いさんのお友だちよ。私ちか近ちかうちにまた兄いえといっしょに家もを持ちますの。美禰子いさんが行ってしまうと、もうやっかいご厄介やっかいになってるわけにゆかないから」

「あなたはお嫁よめには行かないんですか」

「行きたい所ゆがありさえすれば行きますわ」

女はこう言い捨てて心持こころよく笑わらった。まだ行きたい所がないにきまっている。

三四郎さんしろうはその日ひから四日ほど床よっかを離とこれなかつた。五日目いつかめにこわごわながら湯ゆにはいって、鏡かがみを見た。亡者みの相もうがある。思そうい切おもって床屋きへ行とこった。そのあくる日は日曜にちようである。

朝飯あさめしご後、シャツかさを重ねて、外套がいとうを着きて、寒さむくないようにして美禰子みねこの家いえへ行いった。玄関げんかんによし子が立こって、今こ沓脱たへ降いまりようとしている。今お兄あにの所ところへ行いくところだと言う。美禰子いはいない。三四郎さんしろうはいっしょに表おもてへ出でた。

「もうすっかりいいんですか」

「ありがとう。もう直なおりました。——里見さとみさんはどこへ行ったんですか」

「にいさん？」

「いいえ、美禰子いさんです」

「美禰子さんは会堂」

美禰子の会堂へ行くことは、はじめて聞いた。どこの会堂か教えてもらって、三四郎はよし子に別れた。横町を三つほど曲がると、すぐ前へ出た。三四郎はまったく耶蘇教に縁のない男である。会堂の中はのぞいて見たこともない。前へ立って、建物をながめた。説教の掲示を読んだ。鉄柵の所を行ったり来たりした。ある時は寄りかかってみた。三四郎はともかくもして、美禰子の出てくるのを待つつもりである。

やがて唱歌の声が聞こえた。賛美歌というものだろうと考えた。締め切った高い窓のうちのでき事である。音量から察するとよほどの人数らしい。美禰子の声もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌はやんだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子といっしょに秋の空を見たこともあった。所は広田先生の二階であった。田端の小川の縁にすわったこともあった。その時も一人ではなかった。迷羊。迷羊。雲が羊の形をしている。

忽然として会堂の戸が開いた。中から人が出る。人は天国から浮世へ帰る。美禰子は終りから四番目であった。縞の吾妻コートを着て、うつ向いて、上り口の階段を降りて来た。寒いとみえて、肩をすぼめて、両手を前で重ねて、できるだけ外界との交渉を少なくしている。美禰子はこのすべてにあがらざる態度を門ぎわまで持続した。その時、往来の忙しさに、はじめて気がついたように顔を上げた。三四郎の脱いだ帽子の影が、女の目に映った。二人は説教の掲示のある所で、互いに近寄った。

「どうなすって」

「今お宅までちょっと出たところです」

「そう、じゃいらっしやい」

女はなかば歩をめぐらしかけた。相変らず低い下駄をはいている。男はわざと会堂の垣に身を寄せた。

「ここでお目にかかればそれでよい。さっきから、あなたの出て来るのを待っていた」

「おはいりになればよいのに。寒かったですよ」

「寒かった」

「お風邪はもうよいの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色がよくないようね」

男は返事をしず、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。

「拝借した金です。ながながありがとうございます。返そう返そうと思って、ついおそくなった」

美禰子はちょっと三四郎の顔を見たが、そのまま逆らわずに、紙包みを受け取った。しかし手に持ったなり、しまわずにながめている。三四郎もそれをながめている。言葉が少しのあいだ切れた。やがて、美禰子が言った。

「あなた、御不自由じゃなくって」

「いいえ、このあいだからそのつもりで国から取り寄せておいたのだから、どうか取ってください」

「そう。じゃいただいておきましょう」

女は紙包みを懐へ入れた。その手を吾妻コートから出した時、白いハンケチを持っていた。鼻のところへあてて、三四郎を見ている。ハンケチをかぐ様子でもある。やがて、その手を不意に延ばした。ハンケチが三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がふんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに言った。三四郎は思わず顔をあとへ引いた。ヘリオトロープの饜。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかにかかる。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白いハンケチを袂へ落とした。

「御存じなの」と言いながら、二重^{ふたえまぶた} 瞼^{ほそめ}を細目^{おとこ}にして、男^{とお}の顔^おを見た。三四郎^{とお}を遠^おくに置いて、かえって遠^きくにいるのを気づ^きかひすぎ^めた目つきである。そのくせ眉^{まゆ}だけははっきりおちついている。三四郎^{した}の舌^{うわあご}が上顎^{した}へひっついてしまった。

女^{おんな}はややしばらく三四郎^{しやうら}をながめたのち、聞きか^きねるほどのため息^{いき}をかすかにもらした。やがて細^{ほそ}い手^てを濃^こい眉^{まゆ}の上^{うへ}に加^{くわ}えて言った。

「我^{われ}はわが^{とが} 愆^しを知る。わが^{つみ} 罪^{つね}は常^まにわが^{まえ} 前^{まへ}にあり」

聞き取^きれないくらいな声^{こゑ}であった。それを三四郎^{しやうら}は明^あらかに聞き取^きった。三四郎^{しやうら}と美禰^{みね}子はかようにして別^{わか}れた。下宿^{げしゆく}へ帰^{かえ}ったら母^{はは}からの電報^{でんぽう}が来^きていた。あけて見^みると、いつ立^たつとある。